

嘆けとて月かはものさ

思はずるかゝらかほなる

わが涙かな

嘆き悲しめと月はわたしに物思いをさせるのだろうか。いや、  
そうではあるまい。本当は恋の悩みの所為なのに、まるで月の  
仕業であるかのように流れるわたしの涙ではないか。

(百人一首 八七番 西行法師)

中一二三